

メッセージアウトライン マタイの福音書6：31～34 「まず神の国と神の義を」

[31-32]「ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます」

主イエスは私たち人間特有の心配、特に衣食住に関する心配について、弟子たちに、空の鳥を見よ。天の父は彼らを養ってくださる。野の花を見よ。栄華を極めたソロモン王さえ、この花の一つほどにも装っていなかったと神の配慮を教え、それならばあなたがたに、もっと良くして下さらないでしょうか。信仰の薄い人たちよと彼らの不信仰を責められた。

そして「ですから」と話を展開し、結論に導いて行かれる。食べる、飲む、着る、すなわちこれらのものに代表される衣食住は、私たち人間が生活していく上で最も大切なものである。しかしイエスはこれらのことについて心配しなくてよいと言われる。イエスは神の御子であるのでこの地上の人間の生活一般についてはあまり気にかけておられないのだろうか。そうではない。イエスは処女マリアの胎に聖霊によって宿られ、人としてこの世に生まれ、ガリラヤのナザレの田舎で大工の子として生活され、人として生活するために衣食住がいかに大切であるかをよくご存じであった。ではなぜ心配しなくてよいと言われるのだろうか。

イエスは「これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです」と言われているが、この「異邦人」とはイスラエル人から見た外国人であるが、それはすなわち天の父である真の神を知らない者のことを意味している。真の神を知らない者は自分に必要なこれらのものすべてを自分で備えなければならないと考えて、一生懸命に生活のために必要なものを追及する。それは当たり前ではないと言われるかもしれないが、「あなたがた」すなわち天の父なる真の神を信じる信仰者はそれらのもののみを追い求める生き方ではいけないと教えられるのである。もちろん神はこれらのものが信仰者にとっても必要であることはご存じである。しかし続いて、このことに関してイエスは大切なことを教えられる。

[33]「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」

イエスは「まず」と言われて第一番に求めなければならないものは何かということを教えられる。それは「神の国と神の義」である。

「神の国」とは何か。神の国とは神が主権をもって支配され治められる国のことで

あるが、それはこの地上のどこかにある国のことではなく、自分の罪を悔い改めてイエス・キリストを救い主と信じる者の中に来るのである。

マタイ4:17→「このときからイエスは宣教を開始し、『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』と言われた」

ルカ17:20~21→「パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは答えられた。『神の国は、目に見える形で来るものではありません。[見よ。ここだ]とか、[あそこだ]と言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。』」

そして神の国はすでに力をもって到来している。→マルコ9:1

神がこの世のすべてを治め、生きて働いておられると信じ、へりくだって神を求め、神に信頼して生きる。そのような者の中に神の国は来ている。

この世の厳しい現実の中で、さらに確かな神の国の現実に目を留めるために私たちは毎週教会の礼拝に集い、どんな苦しみの中でも神が生きて働き、この世を支配しておられることを信じ、互いに交わりをもって励まし合っている。そのような信仰の歩みの中で私たちの人生を導いてくださる神に自分を明け渡していく。それが神の国を求めるということ。

「神の義」とは神の前での正さのこと。当然のこととして正しくない者は神の国に入ることができない。ではどうしたら神の前に正しい者、義と認めさせていただくことができるのか。イエスはマタイ5:20で「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国には入れません」と言われた。

律法学者やパリサイ人たちは旧約聖書の律法を守ることによって神の前に義と認められると考えていた。それで彼らは一つの掟にいくつもの細則を付け加え、膨大な規則集を作り上げていった。そして彼らはそれを守っていると自負していた。自分たちは正しい者であって、神の国にふさわしい者だとうぬぼれていた。しかし彼らは最も大切な戒めを忘れていた。別の場面でパリサイ人たちがイエスを試そうとして「律法の中でどの戒めが一番重要ですか」と尋ねた時にイエスは言われた。→マタイ22:37~39「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」これが、重要な第一の戒めです。「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という第二の戒めも、それと同じように重要です。」

これはそれぞれ申命記6:5、レビ19:18の言葉である。これが律法の中心であり、戒めの中で最も大切なものであることを彼らは忘れていた。彼らは戒めを守っていると思っていたが、それは形式的なものに過ぎなかったのである。

私たちは、うわべだけ、形だけではなく神の目に正しい者、神に義と認められる者でなければならないのである。これは簡単なことではない。マタイ5:21~22を読み

ば全く不可能のように思われる。それゆえ聖書は「義人はいない。一人もいない」(ローマ3:10)と言っている。

ではどうしたらそのような義を持つことができるのか。私たちは自分の義ではなく神が与えてくださる義を求めなければならない。そしてここに福音がある。神は御子イエス・キリストをこの世に遣わしてくださり、この神の御子イエスが私たちの罪を負い、十字架で死なれたことによって、罪人の私たちが神の前に義と認められる道を開いてくださった。神はご自分のひとり子を罪人として死なせることによって、この御子イエス・キリストを自分の救い主と信じる者にイエスの持つておられた義を与えてくださったのである。私たちの罪がイエス・キリストのところへ行き、イエス・キリストの義が私たちのところへ来たのである。このように神はイエス・キリストを信じる者が罪を赦され、神の前に正しい者として立つことができるようにしてくださった。

それで私たちが求めるべき「神の義」とは神が与えてくださった「イエス・キリストの義」なのである。

この「神の義」を私たちはまず求めなければならない。神の国が信仰によって受け取るものであるように、神の義も信仰によって受け取るものなのである。

イエスは「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです」(マタイ9:13)と言われた。神の前に罪ある私たちは神の国から遠く離れている。しかし、神の国が罪の赦しと神の義をともなって、罪ある私たちのところへ来てくださった。それゆえ私たちは自分の不義を認め、それを告白し、悔い改め、へりくだった心でこれを受け取らなければならない。そしてこの神の義に生きることを求めなければならない。→マタイ5:43-48

次に「そうすれば」という言葉が来る。第一番に求めなければならないものを求める生き方をしているならば、「そうすれば、これらのもの(衣食住に代表される私たち人間にとって必要なもの)はすべて、それに加えて与えられる」とイエスは言われる。

ここで、それはあまりにも楽観主義ではないかという人も出てくるであろう。我々は時間も体力も骨身も削って生活のため、生きるために必死になって働いているのに、神に従い神にすべてを任せれば万事うまくいくのかという声が聞こえて来そうである。

ここで間違っってはならないことは、イエスは今、弟子たちすなわちイエスを信じる信仰者たちに向かって語っておられるということである。そうでない人々にはこの言葉は残念ながら適用されない。

またこのイエスの教えは怠惰の勧めではない。働くことも何もしないでただ寝ていたり、ぶらぶらしていれば神が必要なものを与えてくださるということでは絶対ない。それは大いなる誤解である。

神は最初に創造されたアダム以来、人間が働くことを求めておられる。そして、きちんと生活設計をしていくことも大切である。貯金をする、保険をかけておく、収入と支出のバランスをとる……これらのことは私たち人間がしなければならないことである。

創世記2:15「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた」

出エジプト記20:9「六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ」

マタイ21:28「今日、ぶどう園に行ってお働いてくれ」

エペソ4:28「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい」

I テサロニケ4:11「また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい」

II テサロニケ3:10「あなたがたのところに行ったとき、働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました」

このように人間が生活のために働くことは当然であるが、信仰者はまずその生活の第一に、「神の国とその義」を求める生き方に励まなければならないのである。そうすれば、それに加えて衣食住に必要なものは加えて与えられる。これが神の約束である。

[34]「ですから、明日のことまで心配しなくてもよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります」

この節は25節以下の総まとめになっている。「明日のことまで心配しなくてもよい」という言葉は原語では強い禁止命令となっている。文語訳では「思い煩うな」。「心配する」ということは、たいていは最悪のことを予想してしまう。しかしそれは決して起こらないかもしれない。それならば、そのことを考えてくよくよしても何の役にも立たない。仮に起こったとしても、その時は主なる神が守り導き、最善をなして下さる。主の許しがなければ何事も信仰者に害を与えるようなことは起こらない。これが私たちの信仰ではないか。

マタイ10:29「二羽の雀は一アサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽さえ、あなたがたの父の許しなしには地に落ちることはありません」

ローマ8:31-32「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか」

「明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります」

まさにそのとおりである。過去のことを悔やみ、明日のことを思い煩う。私たち信仰者にとってそのような悪循環はやめて、神がどれほど私たちを愛してくださっているか、どれほど一人ひとりに最善を行ってくださるかを思い、信仰を働かせ、神の国と神の義を求める生き方に励むことが大切である。